

食品ロスの削減に向けて

3年1組26番 吉村舞花

3年3組30番 鳴瀬美佑

Keyword: 「食品ロス」「飢餓」「地球温暖化」「フードバンク」「フードドライブ」

1. はじめに

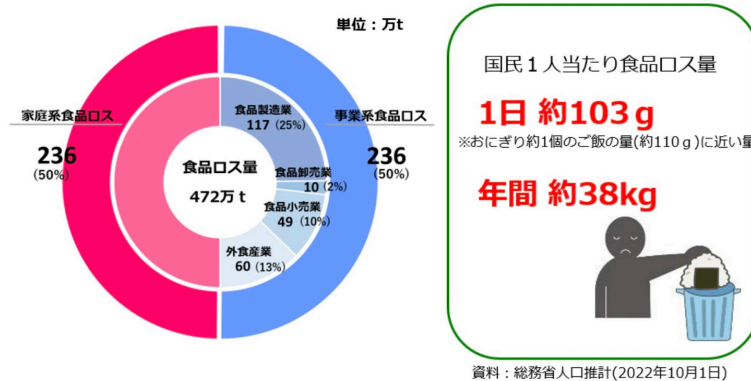
私たちは、世界でも大きな課題である、食品ロスの問題について探究してきた。なぜ食品ロスについて探究してきたのかということ、日常生活を送る上で環境問題の中で食品ロスが一番身近な問題だと感じ、日頃の生活の中で食品ロス削減に向けて私たちが出来ることがあると思ったからである。この問題の解決に向けて、一人ひとりの日常生活における行動を見直すことによって環境問題をもっと身近に感じることが出来て、環境問題の削減に繋がると考える。また、食品ロスの削減は一人では解決出来ないが、私たちが身近なところで小さなことから始めて、それを積み重ねることによって、現状を変えることができるのではないかと考えた。

2. 序論

FAO（国際連合食糧農業機関）の報告書によると、世界では食料生産量の3分の1に当たる約13億トンの食料が毎年廃棄されている。

日本でも1年間に約472万トン（2017年度推計値）もの食料が捨てられており、これは東京ドーム5杯分とほぼ同じ量である。日本人1人当たり、お茶碗1杯分のごはんの量が毎日捨てられている計算になる。現在、地球上には約77億もの人が生活しているが、途上国を中心に8億人以上が十分な量の食べ物を口にできず、栄養不足で苦しんでいる。その一方で、先進国では余った食料がまだ食べられるのに捨てられているのが現状だ。

食品ロスは二つに分ける事ができ、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなど小売店での売れ残りや返品、飲食店での食べ残し、売り物にならない規格外品といった「事業系食品ロス」と、家での料理の作り過ぎによる食べ残しや、買ったのに使わずに捨ててしまうこと、料理を作る時の皮のむき過ぎなどの「家庭系食品ロス」がある。年間の事業系食品ロス、家庭系食品ロスはそれぞれ年間で236万tである。



廃棄された食品を焼却するときにはエネルギーが必要であり、二酸化炭素が発生する。つまり、廃棄する食品が増えることによって温室効果ガスの排出も増え、地球温暖化を加速させることにつながってしまう。また、地球温暖化が関係して極端な気象現象(強い雨など)が多発するようになってきて、世界の飢餓人口を増加させていることにもつながっている。2023年の世界の人口は約80億人で、十分な量の食べ物を口にできずに飢餓に苦しむ人たちが約8億人もいるのが現状だ。(稲葉 2020)

また、この問題は飢餓ゼロを掲げるSDGsの目標2の「飢餓をゼロに」の達成においても日本と世界が一丸となって解決すべき課題となっている。

ここから、日常生活でできることが多い「家庭系食品ロス」に目を向けて、私たち消費者が食品ロス削減のために何ができるのかを考えた。

3. 本論

まずはじめに高校生の食品ロスの現状を調べるために、高校3年生を対象に以下の項目のアンケートを行った。

(1)食品をよく捨てることがありますか？

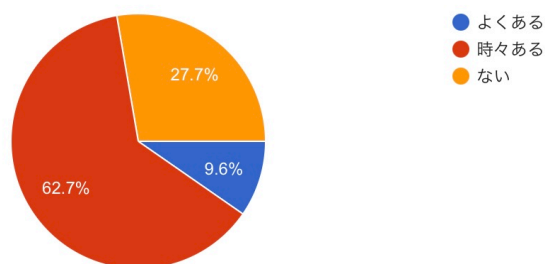
(2) (1)で「よくある」「時々ある」と答えた人に質問です。どのような時に食品を捨ててしまうことがありますか？

(3) 食品ロスを減らすために取り組んでいることがあったら教えてください。

アンケート結果は次の通りである。

(1) 食品を捨てることがありますか？

83 件の回答

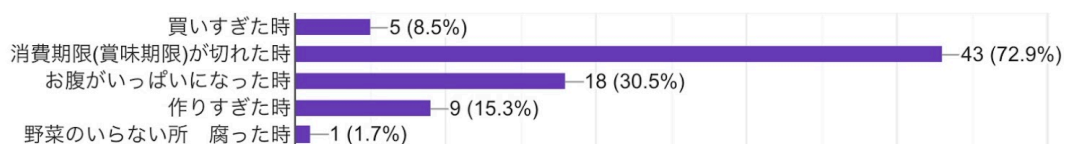


(2)の質問で多かった回答は、消費期限(賞味期限)が切れた時であった。

(2) (1)で「よくある」「時々ある」と答えた人に質問です。どのような時に食品を捨ててしまうことがありますか？



59 件の回答



(3)の回答では、消費期限(賞味期限)に近いものから食べる、家族で賞味期限や消費期限は定期的に確認する、全部食べきる、買いすぎない、作りすぎないなどがあった。

食品を捨てることがある人の割合は過半数を占めていることが分かった。これを受けて私たちは少しでも食品ロスを削減し、高校生、中学生の食品ロスの問題の対策の意識を高められたらと思い、他のゼミのファミリーとフードバンク奈良の小南さんの協力のもとフードドライブを行った。フードドライブとは、家庭で余っている食品を集めて食品を必要としている地域のフードバンク等の生活困窮者支援団体、子ども食堂、福祉施設等に寄付する活動のことである。フードドライブの実施は、食料の支援を必要とする人への支援を通じた貧困問題の解消、分け合う心の醸成を図る、地域の関係性作り、といった本来的な目的・効果をもたらす。私達はフードドライブを以下の手順で行った。

1. フードドライブを実施する場所、期間、食品の寄付先を決める
2. 寄贈を受ける食品、賞味期限などの条件を決める
3. ポスターで実施の告知をする
4. 二日間に渡りフードドライブを実施する
5. フードドライブで回収した食品の集計をする

二回に渡りフードドライブの活動を行った結果、より多くの人の協力を得て、一回目には22.4kgの食品を、二回目には25kgの食品を集めることが出来た。この活動を通して、たくさんの食品を集め一人ひとりの小さな支援で食品ロスという大きな問題の削減に貢献することが出来た。

4. 結論

この探究活動を通して改めて食べ物の大切さや食品ロス問題を学ぶことができた。本やインターネットだけでなく実際に自分達で積極的にフードドライブやアンケートの活動も行い、より正確で現実的なデータを得ることに努めた。これらのことを踏まえて私たち消費者が食品ロス削減のために出来ることは何だろうか。私たちが出来ることは多くあるのではないかと考える。例えば、私たち消費者が各家庭から出る食品ロスを1kgでも多く削減する意識を持つことや、食材や食費を無駄にしないためにも買い物に行く際はある程度の計画を立てて行くことが大切なのではないかと考える。

5. おわりに

情報を収集しただけでなく、消費者である私達に出来ることも一緒に発言することで、より多くの人に実践してもらいやすくなり、一人ひとりの行動が大きな食品ロス削減に繋がることを改めて実感した。また、探究し始めた時は、高校生という立場で食品ロス削減のため出来ることは少ないと思っていたが、フードドライブの活動を通して、多くの人との協力を得て食品ロス問題に貢献できた。しかし、現状としては、世界には食べ物を口にすることができずにいる人がたくさん存在するので、日常生活で食品を使い切ることを意識して、余った食品は地元のフードドライブの機会に寄付するように心がけてほしい。

6. 参考文献・出典

農林水産省."食品ロスの現状を知る". aff (あふ) バックナンバー 2020年10月号.2020-10-10
https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1_01.html (参照2024-6-17)
農林水産省."食品ロスとは". 農林水産省ホームページ.2023-12-26
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/161227_4.html(参照2024-6-17)

セゾンのくらし大研究 編集部."フードロスとは？問題点や日本の現状と社会・家庭でできる取り組みをチェック".セゾンのくらしの大研究.2023-6-22
<https://life.saisoncard.co.jp/life/post/c685/>(参照2024-10-7)
稲葉茂勝 (2020) 『SDGS のきほん 未来のための17の目標飢餓』 P10.P13 ポプラ社